— 3 —

「分離すれど平等」

「再建」の失敗に対するアフリカ系米国人の反応

武装した白人と黒人の間に立つ解放黒人局の代表を描いた再建時代の木版画。再建の失敗が、米国南部の「ジム・クロウ」制度による人種隔離につながった。

南北戦争では60万人以上の米国民が命を失った。そうした犠牲により、この国の最も困難な対立のいくつかが解決された。ついに奴隷制が禁止され、いかなる州も合衆国から脱退することはできないという原則が確立された。しかし、依然として米国社会の将来のあり方をめぐって互いに相容れないビジョンが存在し、その後のアフリカ系米国人に極めて大きな影響を及ぼすことになった。

そのビジョンのひとつは、19世紀および20世紀初期の民主党の考え方で、米国の個人主義と大きな政府に対する懐疑心とを、地方および州政府の権限を連邦政府の権限に優先させる考え方と融合させるもので、少なくとも南部においてはその考え方にさらに根強い白人優位主義が加わった。1850年代に創設された共和党は、経済開発促進のために連邦政府の権限を使うことにより積極的であった。その中心的な信念は「自由労働」と呼ばれるものであった。何百万もの北部人にとって、自由労働とは、人は（当時この概念が適用されるのは主として男性だけであった）、どこでも、いかなる形でも自由に働くことができ、自分の名前で財産を蓄積することができ、さらに最も重要なことは、自分の才能と能力が許す限りいくらでも出世することができる、というものであった。

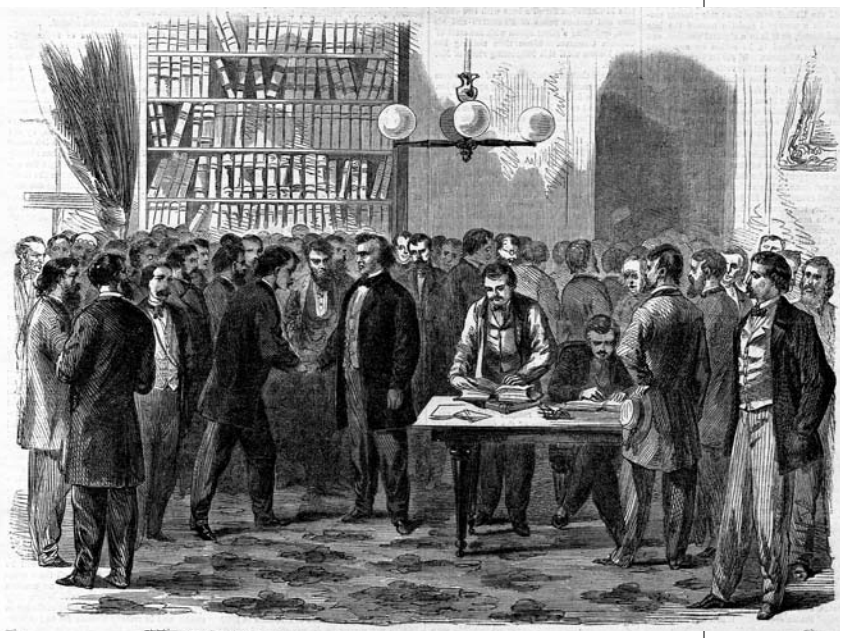
エイブラハム・リンカーンは、こうした自力で出世した人間の模範となった。大統領となった彼は、「わたしは、25年前には労働者として雇われ、おので木材を切ったり、平底船の上で働いたりしていたと語ることを恥とは思わない」と、誇りを持って述べている。多くの共和党員は奴隷制を不道徳であるとして非難し、南部は経済発展においても社会的流動性においても遅れているという考えでは全員が一致していた。

歴史家のアントニア・エサートが述べているように、共和党員は南部を「奴隷所有者の貴族階級を頂点にした、変革不可能な階級社会」と見なした。

北部の軍事的な勝利によって奴隷制が廃止された後は、北部の自由労働の思想に基づき、解放された黒人には公民権が与えられることが要求された。南北戦争後、北部の共和党員は当初、自由労働の原則に従って南部を「再建」しようと固く決意した。南部の多くの白人はこれに抵抗したが、当面は北部の軍事力によって、黒人は投票権と教育の機会を保証され、総じて他の米国民と同様に憲法で定められた権利を享受することができた。しかし、北部で南部との和解を求める声が強くなるにつれ、黒人の願望を支援しようとする北部人の決意は薄れていった。19 世紀末までには、南部の上流階級が、黒人の前進を逆行させ、法律による抑圧的な人種隔離制度を課していた。

議会の再建活動

1865 年 4 月にエイブラハム・リンカーンが暗殺され、アンドリュー・ジョンソン副大統領が大統領に就任した。ジョンソンは、テネシー州出身の民主党員で、1864 年の大統領選では、中道路線と戦後の再建に取り組む意志表示としてリンカーンの副大統領候補に選ばれた。大統領となったジョンソンは、直ちに旧南部連合の諸州を全面的に連邦に復帰させた。南部諸州は、奴隷制を禁止する憲法修正第 13 条を批准することを義務付けられたが、アフリカ系米国人州民の平等と公民権を保護する義務は要求されなかった。ジョンソンのガイドラインの下で組織された白人支配の南部諸州政府は、直ちに黒人取締法を制定した。これは、「自由」であるとされるアフリカ系米国人の行動を厳しく規制する懲罰的な法律であった。典型的な黒人取締法では、外出禁止令を課し、銃器所持を禁止し、また許可なく農場を脱走した元奴隷を放浪者として投獄することさえあった。同時にジョンソンは、放棄されていた南部のプランテーションを旧奴隷所有者に返還することを命じた。



連邦に対して武装蜂起した白人反乱者たちに恩赦を与えるアンドリュー・ジョンソン。南部出身のジョンソンは、エイブラハム・リンカーンが暗殺されたため、大統領に就任した。

多くの北部人はこうした措置に憤慨した。そして自分たちは、人種差別主義の南部上流階級に再び権力を与えるために戦い、命を捧げたのではないと、断固として主張した。1866 年の連邦議会選挙では、黒人の公民権拡張と、さらに広範には、政府の権限により南部を北部の路線に沿って再建することを目指す「共和党急進派」議員が大勢復活した。この第 40 連邦議会は、ジョンソンの承認した南部諸州政府の下で選出された議員に議席を与えることを拒否した。そして、いくつかの重要な公民権法の施行に対するジョンソン大統領の拒否権の行使を覆した。

そのひとつは、解放黒人局の活動を拡大するための法律であった。同局はリンカーンが暗殺される前に設立された連邦政府機関で、解放された奴隷の自由な生活への移行を支援することを目的としており、医療サービスを提供したり、黒人の子どもたちのために何百もの学校を建設したり、解放された奴隷が元の所有主やその他の雇用主と労働契約を交渉する手助けをした。

また 1866 年公民権法は、合衆国内で生まれた者は、人種、肌の色、あるいはそれまでの状況にかかわらずすべて米国民であると明言した。従ってアフリカ系米国人は、契約を結び実行させる権利、訴訟を起こし、裁判を受ける権利、そして財産を所有する権利を獲得した。

ジョンソンは、こうしたさまざまな措置に反対し、異論はあるもののほぼ間違いなくその適用を妨害しようとしたため、連邦議会下院は 1868 年にジョンソンを弾劾（起訴）し、憲法で定められた大統領罷免の手続きを開始した。上院は 1 票差でジョンソンを無罪としたが、それ以降ジョンソンは任期を通じて議会の再建計画にほとんど抵抗しなかった。

最も重要なのは、提案されている合衆国憲法修正第 14 条を旧反乱州が批准するまではそれらの州が議席を取り戻すことはできないということを、議会が明確にしたことである。この修正条項は、後に、近代の公民権運動が人種の平等を求める主張の法的基盤となった。修正第 1 条から第 10 条までは一括して権利章典と呼ばれ、連邦政府による侵害から米国民を守るものであった。しかし、権利章典は、州政府が制定した人種差別主義的な法律からアフリカ系米国人を守ることはほとんどできなかった。1868 年 7 月に批准された修正第 14 条はこの点を改善し、「いかなる州も、法の適正な過程によらずに、何人からもその生命、自由または財産を奪ってはならない。いかなる州も、その管轄内にある者

に対し法の平等な保護を否定してはならない」と定めている。それからほどなくして採用された修正第15条は、「合衆国市民の投票権は、人種、肌の色または隷属の前歴を理由として、合衆国または州によって拒否または制限されることはない」と明言している。

一時的な前進、そして多くの後退

南部各地で北軍兵士が再建法を執行したため、アフリカ系米国人は大きく前進することができた。奴隷小屋や強制労働といった奴隷制を支えていた要素が解体された。黒人たちが独自に設立する教会が増えていった。黒人牧師の率いるこれらの教会は、後にマーティン・ルーサー・キング・ジュニアをはじめとする指導者たちが近代公民権運動を発展させていくための基盤となった。

南部のいくつかの州では、黒人有権者と少数の白人が手を組んで、共和党主導の政府を選出した。多くの黒人が、州および郡政府で重要な公職に就いた。連邦議会では、アフリカ系米国人2人が上院議員に選出され、14人が下院議員となった。その代表的な存在が、アラバマ州初の黒人議員ベンジャミン・スターリング・ターナーであった。奴隷として生まれたターナーは、リンカーンの奴隷解放宣言によって自由となった。間もなく起業家として頭角を現し、続いてセルマの収税官および市会議員に選出された。セルマは、後に20世紀の公民権闘争で極めて重要な役割を果たすことになる土地である。1870年に連邦下院議員に選出されたターナーは、黒人の南北戦争退役軍人のために月々の恩給を確保した。また自分の選挙区のためにより多くの連邦政府支出を獲得すべく努力した。

再建時代のアラバマ州から連邦下院議員に選出されたベンジャミン・スターリング・ターナー。再建時代が終わり、北軍兵士が南部から撤退するとともに、南部の黒人たちは組織的に政治的権利を奪われていった。

再建時代の南部における共和党主導の州政府は、概して税金を引き上げ、社会福祉を拡大した。その革新的な事業としては、州の支援する教育制度や、経済成長のための補助制度などがあった。こうした改革の恩恵を最も大きく受けたのはアフリカ系米国人であり、その当座は、彼らの公民権が永久的に確保されたかのように見えた。

しかし、南部の白人の大多数は、黒人の平等に抵抗する決意を固めていた。彼らの多くは、小さいころから教え込まれた黒人の劣等性という厳しい固定観念を捨てることができなかった。多くの南部の白人は非常に貧しく、目に見える人種的優越性という認識に自らのアイデンティティーを求めた。南部の上流階級は、こうした人種的な分裂によって、共通の経済的利益を追求しようとする人種間の政治的協力を妨げることができる、と考えた。彼らはしばしば、政治的権力を回復するための手段として、白人の人種的な怒りを利用した。

この時代の南部の白人は主として民主党員であり、南部の白人の共和党員に対して激しい政治的攻撃を開始した。彼らは、南部人の共和党員を「スキャラワグ（役に立たない小さな動物）」と呼んだ。また南北戦争後の南部で一旗上げようとしてやってきた北部人は「カーペットバッガー」と呼ばれた。彼らはカーペットで作った旅行バッグを持って北部からやってきたと言われたからである。

新たに権限を与えられたアフリカ系米国人に対する反動はさらに過酷であった。黒人有権者を威嚇し投票をさせないようにするために、「白いカメリアの騎士団」（南部に咲く純白のカメリアの花を白色人種の純血の象徴としたもの）や「クー・クラックス・クラン（ＫＫＫ）」など、暴力で黒人を襲撃する秘密のテロ組織が結成された。1874年にニューオーリンズで行われた選挙では、ユリシーズ・Ｓ・グラント大統領が、公正な選挙を実施するために、歩兵３連隊と砲艦の船隊を派遣した。グラントは連邦政府軍の力でクランを粉砕したが、その後も過激な白人たちが非公式の「社交クラブ」を結成して暴力行為を続けた。歴史家のジェームズ・Ｍ・マクファーソンによると、こうした社交クラブは「自警団的な組織であり、『黒色および褐色のニグロやカーペットバッガーによる支配から南部を取り戻す』ことを目指した南部諸州の民主党の武装補助団体として機能していた」

北部の白人の間でもグラントの行動は行き過ぎであったという意見が一部にあり、またこの戦いに疲れを感じ始める人々も多かった。マクファーソンは次のように書いている。

> 北部人の多くは、白人同盟と「ニグロやカーペットバッガー」の州政府に対して、「けんか両成敗」という態度を取った。彼らは、連邦軍を撤退させ、南部の問題は南部の人々に解決させよう、その結果南部を白人優位主義の民主党が支配することになってもかまわない、と主張した。

そして、事実、ほぼその通りの結果となった。不正や威嚇や暴力で損なわれた選挙によって、民主党は再び南部各地で徐々に州政府を支配するようになった。1876年の大統領選挙は大接戦となり、政治的交渉によって1877年に共和党のラザフォード・B・ヘイズが勝者となった。その見返りとして、ヘイズは最後の連邦軍を南部から撤退させた。こうして、当時のアフリカ系米国人の大多数を占める旧南部連合州に住んでいた黒人たちは、再び人種差別的な州法に翻弄（ほんろう）されることとなった。

「ジム・クロウ」の出現

その後、特に1890年以降、南部各州の政府は、日常生活のほぼあらゆる側面で人種の分離を義務付ける人種差別法を採用した。こうした法律によって、公立学校、列車の車両、公立図書館、水飲み場、レストラン、ホテルなどをすべて、白人用と黒人用に分けることが義務付けられた。このような制度は、俗に「ジム・クロウ」と呼ばれるようになった。その由来は1828年のミンストレル・ショーの「ジャンプ・ジム・クロウ」という歌であったが、これは白人の芸人が顔を黒く塗って無学で劣等な黒人のカリカチュアを演じたものであった。

連邦裁判所が憲法による保護を広義に解釈したならば、ジム・クロウ制度は存在できなかったはずだ。しかし司法府は、逆に法の細部や抜け穴に固執し、人種差別法を無効とすることを避けた。1875年に連邦議会が制定した公民権法を最後に、その後1世紀近く公民権法が制定されることはなかった。1875年公民権法は、「何人」も、いかなる人種あるいは肌の色の市民に対しても、ホテル、劇場などの公共施設、公共の娯楽施設、および公共の輸送施設において、平等な扱いを拒否してはならないと定めた。しかし、1883年に最高裁判所は、修正第14条は州による差別を禁止しているが、個人による差別を禁止していないとして、この公民権法を違憲と判断した。従って、連邦議会は、個人による差別行動を禁止することはできなかった。

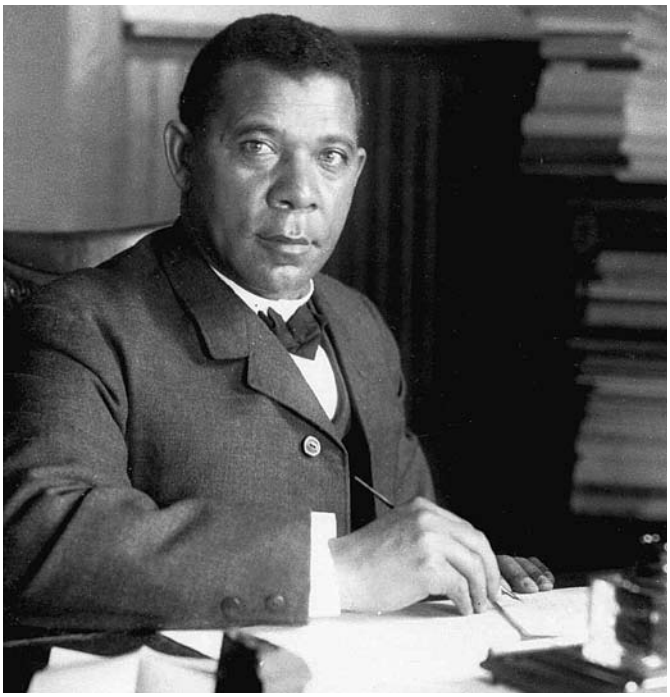
1896年に、おそらく最も重要と思われる判決が下された。その6年前にルイジアナ州が、白人、黒人、および混血の「有色人種」のために別々の鉄道車両を設けることを義務付ける法律を採用していた。この法に反対する黒人と白人の市民から成る団体が、ホーマー・プレッシーという男性を説得してこの法律を試させた。プレッシーは、公共教育の推進者で、肌は白かったが、曾祖母が黒人だった。彼は、「白人専用」の鉄道の切符を買い、座席に座ってから、車掌に自分の先祖は黒人であると告げた。プレッシーは逮捕され、訴訟が始まった。

この訴訟は1896年には最高裁で審理され、最高裁は7対1でルイジアナ州法を支持する判決を下し、多数派の見解として「この2つの人種の隔離を強制することは、有色人種に劣等の捺印を押すこと」ではない、と述べた。米国の黒人がこれに同意しない場合、それは彼ら自身の解釈であり、法律の解釈ではないとされた。こうして最高裁判所が、いわゆる「分離すれど平等」という人種隔離制度に、その権威と認可を与えたのである。

プレッシー事件（正式には「プレッシー対ファーガソン」事件）は、後に公民権運動の支持者によって頻繁に引証されることになるが、この判決の問題のひとつは、「分離」は決して「平等」ではなかったという点であった。有色人種用と指定された公立学校およびその他の施設は、ほとんど例外なく、白人用の施設に比べて劣悪であった。多くの場合、その差は極めて激しかった。しかし、さらに根本的な問題は、合衆国憲法を公正に解釈した場合、米国民を人種に基づいて分離することが正当であるかどうかということであった。プレッシー事件でただ一人判決に異議を唱えたジョン・マーシャル・ハーラン判事の次の言葉は、今日も大きな意味を持っている。

> 合衆国憲法に照らして法的見地から言えば、この国には、他の市民より優位に立つ支配階級の市民は存在しない。ここにはカースト制度はない。わが国の憲法は、人種による差別をせず、市民の間に階級を作らず、またそうした階級制度を容認しない。公民権に関して、すべての市民は法の前に平等である。

ハーラン判事の見解は、最高裁判所が、「ブラウン対教育委員会」事件でプレッシー事件の判決を全員一致で覆した1954年になって、ようやく広く認められることになる。しかしながら、アフリカ系米国人は、ジム・クロウ制度が台頭してきた当時にあっては、それに対抗する新たな手段、そして公民権を獲得するための新しい戦略を必要としていた。



ブッカー・T・ワシントンは、アフリカ系米国人が将来における政治的利益を獲得するための手段として、経済力をつけることを主張した。

ブッカー・T・ワシントン　経済的自立の追求

再建の失敗と、法的に強制された人種隔離制度の台頭により、アフリカ系米国人は難しい選択を余儀なくされた。彼らの圧倒的多数はまだ米国南部に住んでおり、人種の平等に対する激しい、時には暴力的な抵抗に直面していた。政治活動によって直接的に公民権を要求しても無駄であると考える黒人たちもいた。ブッカー・T・ワシントン（1856～1915年）の主導するそうしたグループは、黒人の経済的発展に重点を置くよう主張した。一方著名な学者で知識人のウィリアム・エドワード・バーグハート（W・E・B）・デュボイスらを中心とする人々は、合衆国憲法と、南北戦争後の憲法修正条項によって約束された投票権その他の公民権を獲得するために、妥協を排した活動を続けることを主張した。

奴隷として生まれたブッカー・T・ワシントンは、奴隷解放宣言が発表されたとき、9歳前後であった。バージニア州南東部のハンプトン師範・農業学校（現在のハンプトン大学）で優秀な成績を上げ、教師として就職。1881年には、アラバマ州メーコン郡に新設されたアフリカ系米国人の学校の校長となる機会を与えられた。

ワシントンは当時すでに、実践的な技能と経済的な自立が黒人の前進の鍵であるという結論に達していた。そしてタスキギー師範・産業学校（現在のタスキギー大学）と改名されたこの新しい学校の基盤を産業教育に置くことにした。男子学生は、大工、鍛冶などの技能を学び、女子学生は通常、看護や裁縫を学んだ。またタスキギーでは、南部各地のアフリカ系米国人の学校で教える教員たちを養成した。こうしたアプローチは、国家に対して公民権問題に正面から取り組むことを強制せずに、経済的生産力を持つ黒人市民の育成を約束するものであった。石油王ジョン・D・ロックフェラー、鉄鋼業のアンドリュー・カーネギー、そしてシアーズ・ローバック社の社長ジュリアス・ローゼンウォルドをはじめ数々の有力な慈善家が、タスキギー学校のために資金を調達し、タスキギーは規模、評判、名声共に拡大していった。

1895年9月、ワシントンは、主に白人から成る聴衆を前に、有名な「アトランタ妥協」の演説をした。彼は、アフリカ系米国人の直面する最大の危険について次のように語った。

> （その危険とは、）奴隷から自由の身へと大きく跳躍する中で、われわれの多くが自らの手で生産して暮らすべきであることを忘れ、ありふれた労働に威厳と栄誉を与え庶民の職業に知識と技能を与えれば与えるほど繁栄できることを忘れかねないということである。（中略）われわれは、人生の上層からではなく下層から始めなければならない。また、不平不満を言うことによってわれわれの出世の機会を陰らせてはならない。

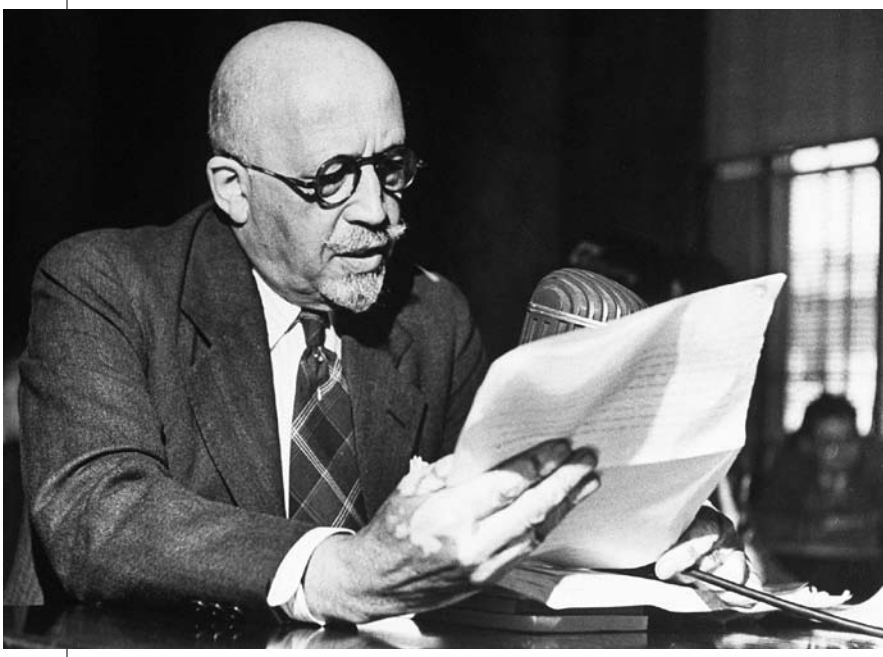
当然のことながら、多くの白人は、黒人が政治的な地位を求めるより不動産や職業的技能を求めることに集中する、という考えに安心を見出した。ジム・クロウ制度を容認する考え方であると思えたからである。ワシントンがアトランタでの演説で述べたように、「今は、工場で1ドルを稼ぐ機会の方が、1ドルを支払ってオペラ劇場へ行く機会よりも価値がある」のであった。

しかし、ワシントンの演説をよく読んでみると、彼が永久に不平等を容認するつもりはなかったことが分かる。彼は、「今は」オペラを見るより働くことの方に価値があると述べ、徐々に社会的資本を蓄積していくようアフリカ系米国人に求めたのである。また彼自身がより単刀直入に述べているように、「どの人種であれ世界の市場に何らかの形で貢献するものがあれば、なかなか排斥されることはない」のであった。

ワシントンは長年にわたりこの国のアフリカ系米国人を代表する存在だったが、彼の考え方から離れていく黒人が少しずつ増えた。ひとつの問題は、南北戦争後の南部全体が貧しく、近代化や経済開発において北部に遅れを取っていたことである。白人・黒人を問わず、南部の人々は、ワシントンが期待したほど大きな機会には恵まれなかった。またいつか分からない未来に完全かつ平等な公民権が得られるまで待つという考え方を拒否する黒人にとっては、ワシントンの漸進主義的な姿勢は受け入れ難かった。

W・E・B・デュボイス　政治運動の推進

多くの黒人は、指導者としての存在を歴史家で社会科学者のW・E・B・デュボイス（1868～1963年）に求めた。テネシー州ナッシュビルの伝統ある黒人大学フィスク大学を卒業したデュボイスは、ハーバード大学で歴史学博士号を取得し、アトランタ大学（解放黒人局の援助で創設され、黒人の



1945年、連邦議会で証言をするW・E・B・デュボイス。20世紀における米国の偉大な思想家の一人である。

教師、司書、およびその他の専門職者を養成）の教授となった。米国の黒人の生活に関する多くの学術研究書を執筆･編集。社会科学が人種関係改善の鍵を提供すると考えた。

しかし、法律によって認められた人種差別が南部全体に根を下ろすにつれて（リンチによる差別が横行し、しばしば暴徒化した人々が法の枠を越えて「犯罪容疑者」を捕獲し、ほとんど証拠もなく、また裁判もなしに殺害することもあった）、デュボイスは徐々に、アフリカ系米国人の公民権を推進する唯一の手段は直接的な政治運動と抗議である、との結論に達するようになった。当然、ブッカー・T・ワシントンと意見が対立することになる。ワシントンは、依然として米国の黒人の経済的発展を優先事項とする一方で、ある程度の政治的支援を得るためにひそかに全国の共和党員と政治的に提携していた。

1903年に、デュボイスは著書『The Souls of Black Folk』を出版した。学者のシェルビー・スティールによると、この本は「順応と謙虚という黒人種の思想形態に対する激しい反発」であり、「20世紀の問題は、人種差別の問題である」ことを正面から宣言した。デュボイスはブッカー・T・ワシントンについて次のように述べた。

> 彼の理論のせいで、北部でも南部でも白人は、黒人の問題は黒人に背負わせ、自分たちは批判的かつ悲観的な傍観者となる傾向があった。しかし実際には、そうした問題は国民全体で背負うべきものであり、われわれがこれらの大きな間違いを正すことに全力を傾けないならば、われわれすべてに罪がある。

またデュボイスは、ワシントンが職人的な技術だけを重視したことにも異議を唱え、1903年に執筆した論文で、「どの人種でも同様、黒人種もその中の極めて秀でた人々によって救われる」と主張した。そして、アフリカ系米国人の「10人に1人の才能ある人々」を「この人種の思想的指導者および文化使節」としなければならない、と述べた。デュボイスの考えでは、そのためにはブッカー・T・ワシントンがタスキギー学校で提供した実践的な訓練は不十分であった。

> 収入を稼げるようにすることを目標に人を訓練するなら、稼ぐことのできる人を養成することはできても、必ずしも人を養成することはできない。技術的な能力を教育の目標とするならば、職人を作ることはできても、人を作ることはできない。人間性を学校の目標とすることによってのみ、真の人を作ることができる。それは、知性、広い思いやりの心、過去と現在の世界や世界と人との関係に関する知識などである。（中略）こうした基盤の上にこそ、収入を得る能力、熟練した技能、鋭敏な頭脳を築くことができ、そうすれば子どもも大人も、生活の糧と人生の目的とを混同する恐れがなくなる。

その2年後、デュボイスおよび大勢の黒人知識人が、順応と漸進主義というワシントンの方針に真っ向から反対する公民権組織「ナイアガラ運動」を設立した。デュボイスは、「われわれは完全な成年男子参政権を今すぐ要求する！」と宣言した。（彼は女性の参政権についても支持した。）ナイアガラ運動は、1906年に、ジョン・ブラウンの反乱の地ウェストバージニア州ハーパーズフェリーで有名な会議を開催した。そして、ジム・クロウ法に反対するよう議員らに働きかけ、パンフレットやちらしを配布し、公民権と人種の平等に関する問題提起に努めた。しかし、この組織は、組織力・資金力共に不足しており、1910年には解散した。そのころには、新しい、より強力な組織が誕生しようとしていた。

1908年8月、イリノイ州スプリングフィールド市で、黒人男性が白人女性を強姦しようとしたという誤った容疑を掛けられた事件が発端となり、黒人を襲う暴動が発生した。この暴動で7人が死亡し、何千人ものアフリカ系米国人がスプリングフィールドの町からの逃亡を余儀なくされた。婦人参政権運動家のメアリー・ホワイト・オビントンが先頭に立って、改革主義者の組織会議が招集された。後に彼女は、「奴隷制廃止論者の精神を復活させなければならない」と書いた。間もなくオビントンの組織は拡大し、デュボイスなどのアフリカ系米国人活動家と連携した。そして1910年に、彼らは、全米有色人種地位向上協会(NAACP)を設立した。この新組織の指導層には、多くのユダヤ人を含む白人もいた。デュボイスも指導者の一人として、NAACPの有力な機関誌『ザ・クライシス』の主筆となった。

1913年に、南部生まれのウッドロー・ウィルソン大統領が連邦政府の公務員の人種隔離を認めたのに対し、NAACPは裁判によってこれに対抗するようになり、ジム・クロウ法を覆すための何十年にもわたる法的な闘いを開始した。デュボイスの指導の下で、「ザ・クライシス」誌は時事を分析し、ラングストン・ヒューズやカウンティー・カレンなど1920年代・30年代のハーレム・ルネッサンスの偉大な作家の作品を掲載した。同誌の購読者数は10万人を超えたとも言われている。

デュボイスは執筆を続け、20世紀における米国の偉大な思想家の一人としての名声を確固たるものとした。彼は、屈指の反植民地主義者、そしてアフリカ史の専門家となった。1934年、汎アフリカ民族主義を提唱してマルクス主義・社会主義的な思想を強めていったデュボイスは、人種差別撤廃を求めるNAACPと決別した。デュボイスは、90歳代まで生き、死去したときにはガーナ国民であり熱心な共産主義者となっていた。

しかし、彼が設立に貢献したNAACPは、その後、近代公民権運動の闘いを始めることになる。

マーカス・ガーベイ
もうひとつの道

20世紀初めの主な黒人民族主義者の一人であるマーカス・ガーベイ（1887～1940年）は、ジャマイカで生まれたが、最も広く活躍したのは米国においてであった。熱心な資本主義者だったガーベイは、アフリカ系米国人と世界各地の黒人たちは富と権力を自らの手に集中させるためのさまざまな組織の形成に協力すべきである、と考えた。その目的を達成するために世界黒人地位改善協会(UNIA)などを設立した。ブッカー・T・ワシントンの著書『Up From Slavery』を読んだガーベイは、こう自問した。「黒人の政府はどこに存在するのか。彼の国王と王国はどこに存在するのか。彼の大統領、国家、大使、陸軍、海軍、そして偉人たちはどこに存在するのか。わたしは見つけることができなかった。わたしは、それらを生み出すために貢献しようと決心した」

マーカス·ガーベイの黒人民族主義は、アフリカ系米国人の思想のひとつである。しかし、ほとんどの黒人は、米国の政治・経済における平等と全面的な参加を求めて闘う道を選んだ。

ガーベイは、ジャマイカのセント・アン教区で生まれ、10代初めには名付け親である印刷工アルフレッド・バローズの徒弟となった。ガーベイの父親もバローズも読書好きであり、マーカスは小さいころから文字に触れて育った。キングストンに移住したガーベイは、植字工として極めて優秀な才能を発揮するとともに、ジャーナリズムに関心を持つようになった。

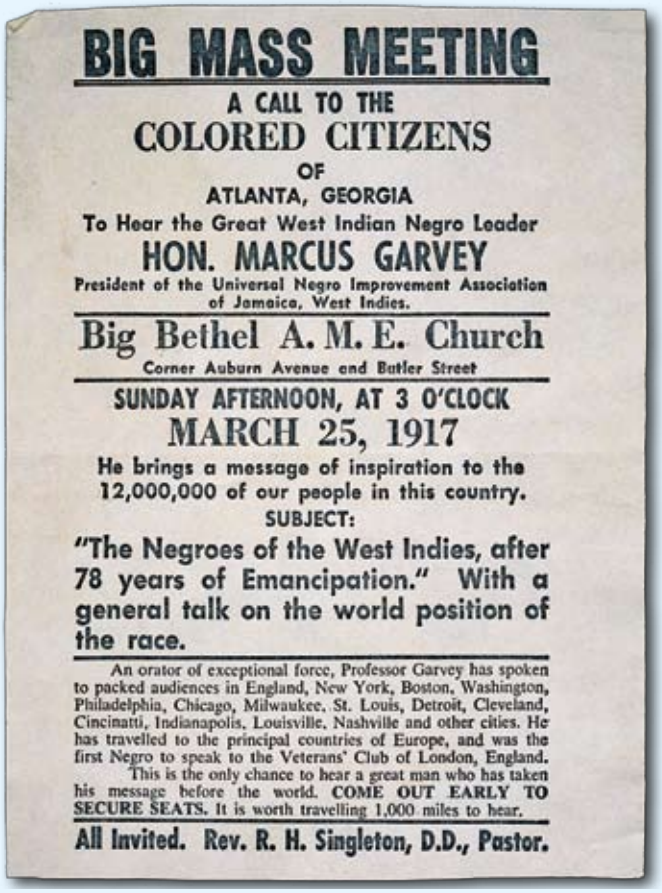
労働組合を結成しようとしてブラックリストに載せられたガーベイは、ジャマイカから中南米に移り、その後英国で2年間暮らした。英国では、ロンドン大学で非公式に学び、『アフリカン·タイムズ』と『オリエント・レビュー』を創刊したスーダン系エジプト人の黒人民族主義者ドゥーゼ・モハメッド・アリの下で働いた。

ガーベイは、黒人の権利拡大を目指す計画を米国で展開しようと決心した。1916年に米国に到着したガーベイは、アフリカ系米国人は経済力を築くことによって尊敬を勝ち取れるのだと主張した。そうした目的を実現するために、食料雑貨品店、クリーニング店など、白人の経済から独立して繁栄することのできる黒人所有の事業ネットワークを目指した。こうした活動をはじめ、大衆を組織しようとするガーベイの初期の試みはあまりうまくいかなかったが、その粘り強い努力が注目を集めるようになり、第1次世界大戦が終わるころにはガーベイの名前は米国の黒人の間で広く知られるようになっていた。

ガーベイは、マスコミの操作が非常に巧みであり、ドラマチックな公共のイベントを企画することに長けていた。彼が創設した新聞『ニグロ・ワールド』紙は、米国各地および中南米の一部の国で配布された。またガーベイの企画で毎年ニューヨーク市で開催された大会は、集まった男女が赤と黒と緑の横断幕の下を行進する華やかな催しであった。この旗をはじめとする3色のシンボルは、今日でもアフリカ系米国人の間で広く使われている。ガーベイの支持者たちは、軍服を身に着けて人目を引くことがあったが、これは彼の黒人民族主義運動が目指した軍国主義的なイメージを表したものであった。

ある時、アフリカの辺ぴな村のコンゴ人の指導者が、米国について何か知っているかと聞かれ、「マーカス・ガーベイの名前は知っています」と答えたという伝説的な話がある。

UNIAは、ブラック·スター·ラインという船舶会社を設立し、黒人所有の事業を世界に広げようとしたが、これは失敗に終わった。また、主に小



BIG MASS MEETING

A CALL TO THE

COLORED CITIZENS

OF

ATLANTA, GEORGIA

To Hear the Great West Indian Negro Leader

HON. MARCUS GARVEY

President of the Universal Negro Improvement Association of Jamaica, West Indies.

Big Bethel A. M. E. Church

Corner Auburn Avenue and Butler Street

SUNDAY AFTERNOON, AT 3 O'CLOCK

MARCH 25, 1917

He brings a message of inspiration to the 12,000,000 of our people in this country.

SUBJECT:

"The Negroes of the West Indies, after 78 years of Emancipation." With a general talk on the world position of the race.

An orator of exceptional force, Professor Garvey has spoken to packed audiences in England, New York, Boston, Washington, Philadelphia, Chicago, Milwaukee, St. Louis, Detroit, Cleveland, Cincinatti, Indianapolis, Louisville, Nashville and other cities. He has travelled to the principal countries of Europe, and was the first Negro to speak to the Veterans' Club of London, England.

This is the only chance to hear a great man who has taken his message before the world. COME OUT EARLY TO SECURE SEATS. It is worth travelling 1,000 miles to hear.

All Invited. Rev. R. H. Singleton, D.D., Pastor.

1917年のマーカス・ガーベイの演説会を宣伝するちらし

額の株式を大量に普通の労働者層に販売し、蒸気船数隻を購入したが、残念なことにこれらの船舶は老朽船であった。

ガーベイは人種は分離すべきだと考え、クー・クラックス・クランをはじめとする白人の人種差別組織の指導者たちと協力しようとした。クランの指導者と会談したガーベイは、それでなくとも彼を敵視していた黒人指導者たちから総攻撃を受けた。中でも、米国で初めて成功した黒人主体の労働組合「寝台車ポーター組合」の指導者A・フィリップ・ランドルフは、ガーベイに激しく反発した。

ランドルフは、ガーベイが白人の人種差別主義者らと協力して、米国の黒人をアフリカに帰らせようとしている、と非難した。ガーベイは、そのような意志はないと否定したが、リベリア共和国に使節を派遣して新たな事業の可能性を調査させたことは事実であり、またガーベイの思想はアフリカの若い知識人の間でかなりの支持を得ていた。

1925年に、ガーベイは、連邦政府により郵便詐欺の罪で収監された。ガーベイはこの罪を否認し、彼を批判する人々の中にもこれは不公正であるという意見があった。1927年にカルビン・クーリッジ大統領がガーベイに恩赦を与えたが、米国市民ではない既決重罪犯としてガーベイは直ちに母国ジャマイカへ強制送還された。ガーベイの最も厳しい批判者の一人だったW・E・B・デュボイスは、彼の幸運を祈り、母国で活動を続けるよう励ました。

ガーベイは、英国ロンドンに落ち着き、新しい雑誌『ザ・ブラック・マン』を創刊した。同誌は、ヘビー級ボクシング・チャンピオンのジョー・ルイス、芸能人で政治活動家のポール・ロブソン、また物議をかもした宗教指導者のディバイン神父など米国の著名な黒人を、人種的リーダーシップを十分に発揮していないとして非難した。しかしガーベイは、そこでもやはり以前のように多くの人々を組織に引きつけることはできなかった。米国ではある程度の人気を維持し、初期の活動の本拠地であったミシガン州デトロイトから川を隔てたカナダのオンタリオ州ウィンザーで集会を開いたときには、熱心な聴衆が集まった。晩年のガーベイは、ロンドンを拠点として活動し、1940年、同地で死去した。

ウィルソン・ジェレマイア・モーゼズ

モーゼズは、ペンシルベニア州立大学歴史学フェリー教授。学術論文に『Marcus Garvey - A Reappraisal』、著書に『The Golden Age of Black Nationalism, 1850-1925』などがある。